

人から人へつなぐ 森づくり 町(村)づくり 人づくり

南後志 北限ブナ林見学会

(黒松内町・寿都町・島牧村)

地域産業研究会地域活性化分科会

柴 田 登

1. 無から貴へ

無、朽、貴。ブナを漢字で表わす時、木偏の右側の旁（つくり）に充てられる字である。今回の見学会後の情報交換会で伺った。資源としては燃やす以外に使い道が無いと思われていた時代もあったブナだが、滑らかな木肌を持ち、奔放な枝振りに豊かに取り付いた丸く小さな葉が柔らかな木陰を作る様子からヨーロッパでは「母の木」と呼ばれ、近年我が国でも環境志向から森林への関心が高まってブナ林のもたらす効果が見直されるに至り、そのブナに対する敬意が漢字にも表れているという印象を持った。因みに島牧村では「櫨」を、黒松内町では「櫟」を、ブナをブランドにした商品名等に使用している。

2. きっかけ

今回の見学会のきっかけには2つあり、1つは、これまで地域活性化分科会が行ってきた寿都町の森林見学会に参加した島牧村の村起こしグループから技術士会のメンバーに活性化支援の申し出があったこと、2つ目は、今年1月29日の北海道森林管理局での北の国・森林づくり技術交流発表会の後、黒松内森林事務所の松本首席森林官（当時）の呼び掛けで発表会参加の黒松内町、寿都町、島牧村、技術士会、森林管理署、北大等の関係者が集まった席で、片岡寿都町長から黒松内・寿都・島牧3町村連携による北限のブナ林再生プロジェクト立ち上げの提案があったことである。

その後、地域活性化分科会のメンバーを兼ねる地域産業研究会の幹事数名で3町村との打合せを重ね、今回の見学会と情報交換会になったものである。

3. 見学地概要

見学地の概要と見学順序は次の様である。

9月11日（金）：（黒松内町）添別ブナ林→月越峠（小川の沢ブナ林（寿都町）遠望）→（島牧村）千走川ブナ林→太古の森（遺伝子保存林）、賀老の滝→南後志3町村及び後志森林管理署と技術士との意見交換会（島牧村漁村環境改善センター）

9月12日（土）：（島牧村）サクラマス孵化場→茂津多岬灯台→（寿都町）大和の沢北限ブナ林遠望→法人の森→湯別の湯（低地ブナの更新地）→磯谷高原

4. 道南地域におけるブナ北進の推移

ブナは元々温帯域に育つ落葉樹だが、添別ブナ林ビジターセンターの斉藤均学芸員の話では、忠類村で発見された12万年前のナウマン像の化石と一緒にブナの花粉の化石も見つかっているとのことで、それがウルム氷期（約2万年前）には北限域が新潟県辺りまで下がり、北海道への再上陸は約6千年前、そして黒松内低地帯に辿り着くのが約1千年前。

しかし、和人が後志地方に入って来た160年前頃から大規模に伐採されたこともあり、以降自然林の北進は見られず、昭和3年（1928）に歌才のブナ林が天然記念物に指定されたがその頃には周辺がすっかり開拓し尽くされており、北限域の環境が6千年前から1千年前にかけての状況とはすっかり変わってしまい、それが今後のブナの北進にどう影響するかは不明とのことである。

添別ブナ林では北大の研究グループによる樹液測定センサーによる森全体の蒸散量の推定や光合成の測定等、本州のブナ林との比較研究も行われている。

5. 黒松内町・寿都町・島牧村のブナ林を中心とした比較

ここで黒松内・寿都・島牧3町村の、今回の見学会のテーマであるブナ林を中心とした比較を、情報交換会の話題提供や資料等を基に下表に記す。

情報交換会参加者 ※ ¹		黒松内町	寿都町	島牧村
		(役場) 町長、副町長、総務課長、黒松内ブナセンター長、同学芸員、(民間) 黒松内岳ブナ再生プロジェクト会長、同会員 計7名	(役場) 町長、副町長、産業振興課長、同主幹、同主任、(民間) Club風の学校代表、同会員 計7名	(役場) 村長、副村長、産業課長、同主幹、同主任、(民間) 島牧で楽しむ会代表、同会員3名 計9名
比較項目		黒松内町	寿都町	島牧村
面積(km ²)		345.47	95.37	437.26
人口(人)※ ²		3,208	3,546	1,931
高齢化率(%)		33	35	38
森林 状況 ※ ³	面積(ha)	26,160	7,436	40,511
	国有林(〃)	4,007	1,875	32,934
	林野率(%)	75.7	78.0	92.6
北限のブナ林の 状 況		歌オブナ林(国有林): 92ha 国の天然記念物 歌オブナセンター 北限ブナ林を代表する森 添別ブナ林(町有林): 50ha 町の自然環境保全林 ミニビジターセンター 白井川ブナ林(道有林): 20ha	大和の沢ブナ林: 小団林形成 最北端のブナ林 小川の沢ブナ林: ブナ混交林 混交率30～70%、約130ha 月越ブナ林: 2～3ha 丸山ブナ林: 2～3ha 法人の森: 40数種の樹種の中 ブナ優占群落も 湯別のブナ更新地: 低地ブナ 最低標高?のブナ自生地	賀老ブナ原生林: 10,700ha 日本最大級のブナ原生林 (狩場茂津多道立自然公園) 千走ブナ林: 千走川沿いから 賀老の滝にかけて大きな ブナが点在 太古の森: 遺伝子保存林
ブナを活かした 地域づくり施策		○ブナ北限の里づくり事業 ○歌オブナセンター、添別ミニビジターセンター等を 中心とした森林体験学習 ○国際ブナフォーラム ○特産品の「積」ブランド化 ○「積」を施設名に使用 ○フットパス事業	○「クラブ風の学校」の活動 ・森林調査研究 ・森林見学会・森林学習会 ・ブナ採種から植樹体験 ・小中高生対象のブナフォーラム ○風力発電売電益を環境活動のグループに活用	○「島牧で楽しむ会」の活動 ・黒松内・寿都の活動団体と 連携した森林の啓発活動 ・ブナ林見学会・植樹体験 ○道の駅での狩場山の自然 とブナ林の紹介展示 ○中学生対象の狩場山登山 ○特産品の「櫛」ブランド化
地域づくり施策の 効果○と課題●		○交流人口増加(約15万人) ○移入人口増加(5年で60人) ○町運営交流施設による雇用機会の増加と経済効果 ○環境に恵まれたふるさとに対する誇りの芽生え ○学校での環境教育の充実 ○委託研修・教育交流の定着 ○新鮮・安全な食生活志向 ○日本の里百選に選定 ○フットパス先進地として 国際フォーラムの開催 ●農業生産法人の遊休施設 ●農薬使用と農業経営規模 拡大志向	○交流行事による活性化 ・漁業体験等のイベントの定着と参加者の増加 ・ライダーズミーティング ・技術士会との交流による新たな町の魅力の発見 ・各種のイベントや交流を通じた素朴さの魅力の認識 ○風力発電による町民の環境意識の向上 ●高齢化率36%。元気な高齢者の生きがい創造 ●地域の素朴さと山・川・海の魅力、そして風を活かしたビジネス・産業の創造	○自然豊かなふるさとを大切に思う心の醸成 ○通年観光イベントの定着 ○観光入込数増加(15万人台) ○将来を担う小中高生向け施策の定着 ○森林の恵みをブランド化した特産物の定着 ●地域資源の保全と活用に対する客観的な検討
技術士会への期待		○町づくりの課題解決への支援(上記課題等) ○町の活性化への支援	○「ブナ」を連携の共通ブランドとした南後志 3 町村 全体の活性化への支援	○村の活性化への支援 ○地域資源の保全と活用に対する客観的な検討

※¹:他に後志森林管理署長、黒松内森林事務所関係者3名、北大春木雅寛准教授が参加

※²:2009年6月30日現在の住民基本台帳による

※³:黒松内町からの資料と北海道カラマツ林業歴史研究家(林業技士)坂東忠明氏の資料提供による

6. 黒松内・寿都・島牧のブナ林

黒松内町は人里近い所に奇跡的に残るブナ原生林として昭和3年(1928)に天然記念物に指定された歌才のブナ林の他に添別と白井川のブナ林があり、戦時中と昭和30年代に伐採の危機があったが町民や学者等の努力でそれを免れた歴史を持つ。町は北限のブナ林として平成元年(1989)から「ブナ北限の里づくり構想」を事業化し、ブナのブランド化により全国的にも知られる存在となった。

島牧村には賀老のブナ林という面積10,700haの全国最大級のブナの原生林があり昭和47年(1972)狩場茂津多道立自然公園の指定を受けている。千走川沿いにも多くのブナが存在する。黒松内町と島牧村はブナを町の木、村の木に指定している。

寿都町でもブナの実在は昔から知られていたが、その規模等は不明だった。黒松内のブナが天然記念物となり保護される代わりに開拓の必要から伐られたという側面もあり、伐採後に笹や根曲がり竹の侵入を許し人々の関心を離れたということもあるだろう。しかし、寿都にもかつてどこそこの沢にブナ林があったという記録から地域活性化分科会で森林調査を行っていた板垣技術士と、協力を惜しまない町起こしグループ「Club風の学校」代表の蛭沢氏や町役場の産業振興課の方々、後志森林管理署黒松内森林事務所の松本首席森林官、北大の春木准教授等の地道な調査で最北限となる大和の沢のブナ林が確認され、おそらく自生地としては最低標高地となるであろう湯別地区のブナも発見されている。

又、小川の沢ブナ林は笹等が調査の障害になり規模が不明だったが、板垣技術士の航空写真判定の結果、約130haもの広さのブナ混交林であることが最近になって分かった。

寿都町では離農地跡の低地でブナ更新の様子が見られたり、蛭沢氏の管理する「法人の森」では気楽にブナ観察が出来る等、規模は小さいが黒松内町、島牧村とは違った意味での特徴があり、今、寿都のブナが注目されている。

7. 町づくり、村づくりとブナの関わり

黒松内町は早くからブナによる町づくりを進めており、道の駅やブナセンター、自然の家等の交流施設を整備すると共に、地元の農畜産物、道産食材を使った食品をブランド化して人気の定着を図り交流人口の増加に結び付けている。その効果は町民の自然豊かなふるさとに対する誇りとなって、自然環境や景観を大切に思う暮らしに表れている。又、それがふるさとの景観や既存の施設を活かすフットパス事業の発想に繋がり新しい展開を見せている。

寿都町は黒松内低地帯を寿都湾に吹き抜ける強い風を活かし全国の自治体では初めて風力発電を採り入れた所で、現在総出力量は約12,000kwとなっている。温暖化等の影響から町の基幹産業である寿都湾の漁業を守る為に、森林育成や海岸清掃、磯焼け対策等の活動を行っている町起こしグループへ、数年前からその売電益を助成している。この活動グループは板垣技術士と森林調査を共にしている方が中心となっており、町民の目を海から山へ向ける為に小中高生や市民向けの活動も行っている。

島牧村では狩場山や賀老のブナ林等に代表される山・川・海の豊かな自然の「お宝」を村民の身近な存在とする為の活動を行っている。町では小中学生向けにサクラマスの子魚の放流体験、田植え体験、狩場山登山、卒業植樹等、村の自然や産業と触れ合うプログラムを彼らの成長に合わせて組んでいる。一方民間の村起こしグループは黒松内町、寿都町のグループと情報交換を持ちながら連携した活動を行っている。小中学生向けの森林体験学習、「棚」をブランド名にした無農薬米の栽培、自然食品の開発、ふるさとの環境保全の啓発に向けたブナのシンボルトリーの制定等である。

8. 町づくり、村づくり、森づくりの課題

しかし、良い見通しばかりではない。黒松内町は黒松内低地帯にあることから、強風や海からの霧の発生等で気象条件が悪く、畑作や稲作は振るわず規模の小さい「昭和の農業」と称される状況にある。

規模拡大を目指すには農薬の使用等、環境リスクの高い農法を選択することになり、現在進めている町づくりの方向とは反する結果を招くことに繋がる。

島牧村は豊かな自然の「お宝」に恵まれていながらその保全と活用について、村だけでは良い知恵が浮かばないと藤澤村長は言われる。

寿都町では現在町起こしグループも協力しながら積極的にその対策を検討している海の磯焼け現象だが、最近の気候の温暖化もあって漁業関係者には気がかりなことである。又、寿都町は札幌、函館のほぼ中間に当たり、どちらからも車で3時間弱、宿泊施設も少ないことから通過型の観光になり、冬は強風の為に道路状況も悪く入込が減って一層活気が落ちるという。

森づくりに関しては、後志森林管理署の木谷署長から、森林は資源として見た時にはいくらかでも活用方法はあるが、利活用する所と保護する所を決めてメリハリのある管理を心掛ける必要があり、その為には管理用の林道の整備が欠かせない、最近には森に親しむという考え方から車椅子でも大丈夫な様にと林道に舗装をする所もある、しかし、林道等の施設の整備には必ず大きなリスクが付きまとうもので、その辺の兼ね合いや調整をどう考えて対処して行くかが今後大事になる、とのお話があった。

9. 技術士への期待

これまでの寿都町、島牧村だけでなく、若見黒松内町長からも町の活性化への支援の依頼があった。

各発言者から出された技術士への期待を列記する。

1) 若見黒松内町長

- ①リーマンショックの影響で稼働していない一部上場企業の農業研修施設の活用方法の検討
(3町村連携での活用も含めて)

- ②「昭和の農業」の規模拡大に伴う環境リスク回避の検討

(現状維持で所得補償の考え方もあるが)

2) 片岡寿都町長

「ブナ」を連携の共通ブランドとして、個々の特

徴を活かした南後志3町村全体の活性化への支援

3) 藤澤島牧村長

山・川・海・産業資産等の地域の「お宝」の保全と活用に対する客観的な見方からのアドバイス

4) 木谷後志森林管理署長

今回の連携協力関係の継続

5) 春木北大准教授

森林の効用と言われているものの多くは、実は良く分かっていない。技術の実践を通して人と人、人と地方、人と物を結び付けるのが技術士の役目。

①ブナをキーワードにした話題の収集とその継承

②土壌の汚れと廃棄物の問題を他に先駆けて3町村に協力して取り組んではどうか

③子供達に環境や森林への意識を広める為に、ブナ林再生プロジェクトへの女性の参加を

10. 最後に

情報交換会で各発言者から共通して出た言葉が「人」だった。今回のテーマは森づくり、町づくり、村づくりだが、それらは5年、10年で成るものではない、百年を見据えて人から人へ繋いで行かなければならないという意見だった。「先人の残してくれたブナが無ければ今の黒松内の町づくりは無かった」という若見町長の言葉には重い実感があつた。春木准教授は「ブナで繋がるこの連携は未だ緒に就いたばかり」と言われた。司会の船越技術士が「山・川・海」、「黒松内・寿都・島牧」、「産・官・学」の「3・3・3の連携の継続を」という言葉で情報交換会を締めたが、今回の見学会を一過性のイベントに終わらせることなく、里山、里海、そしてその仲を取り持つ川が一体となって地域を形成している南後志3町村の今後と真摯に向き合って行きたい。当然、私達の技術や使命も人から人へ繋いで行かなければならないものだから。